

# 一貫校生徒による一貫教育に関する評価結果について

全国中高一貫教育研究会紀要第6号  
中高一貫教育10年目の検証(1)より

中高一貫研究グループ

河合優年 武庫川女子大学教育研究所

勝山元照 奈良女子大学附属中等教育学校副校長

齊藤真子・矢木修 名古屋大学教育学部附属中・高等学校 副校長

植田健男 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

# 本調査の目的

本調査の目的は、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(中教審第二次答申)において指摘された利点と懸念について中高一貫教育校の在校生と卒業生を中心として点検することにあつた。

- 利点としてあげられた事柄：  
安定した学生生活、継続性ある教育指導、個性・才能の伸長、豊かな人間関係など。
- 懸念としてあげられた事柄：  
受験競争・受験準備の低年齢化、固定される生徒集団、発達差の大きい生徒への対応の難しさなど。

# 方法

- 1) **調査対象は、全国の中高一貫校の在籍生徒、卒業生および教員であった。在學生は5・6年生を対象とし、卒業生は1999～2004年度までに中学に入学し、2010年3月迄に卒業した生徒とした。**
- 2) **実施期間と依頼方法**  
2009年6月～9月に中高一貫教育校を通じて郵送調査を実施し、調査協力に同意した場合にのみ返送してもらうように依頼した。
- 3) **調査項目**  
項目は、大きく 入学時の準備状況などについて、中高一貫教育のカリキュラム内容について、学校生活について、人間関係について、教育課程における問題点について、進路設計について、全体的な印象について、の各項目群と、中高一貫教育に対する提言などの自由記述から成り立っていた。
- 4) **回収数**  
調査依頼をした学校のうち、25校、2724名から回答を得た。これらの内、中等教育学校は8校、併設型中高一貫校は17校であった。回答した生徒は在校生2235名、卒業生489名であった。うち、在校生で中等教育学校680名、併設内進在校生918名、併設外進在校生637名、卒業年度別では、2005年35名、6年174名、7年92名、8年78名、9年96名、不明14名であった。

# 結果

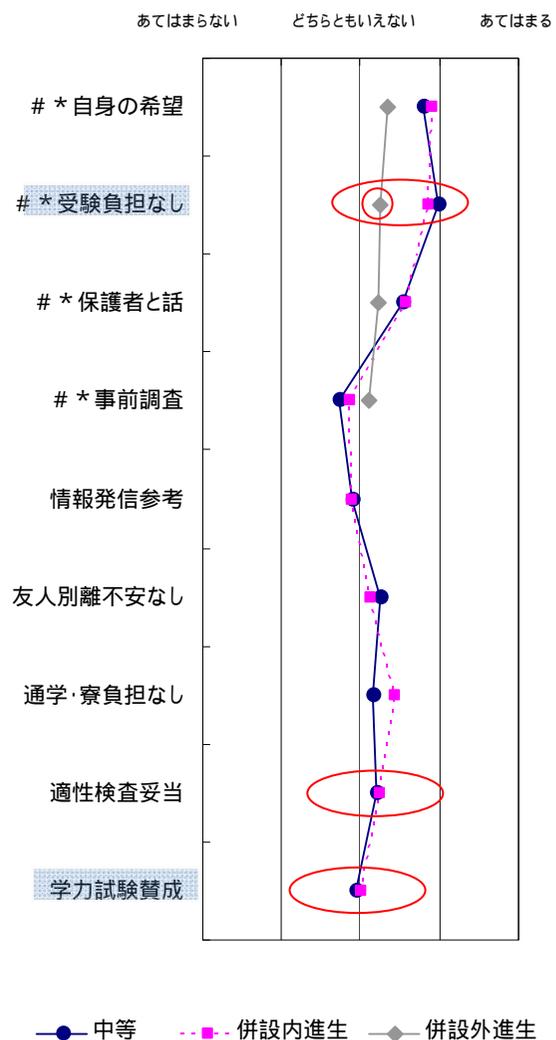
各項目の回答は、「そう思わない」を1、「どちらかというと思う」を2、「どちらともいえない」を3、「どちらかというと思う」を4、「そう思う」を5として、回答者の評定平均を求めた。

以下、図中のRのついている項目は逆転項目である。図では、中等教育学校と併設型一貫校との違いについて上記に基づいて得点化したものを用いて表示している。

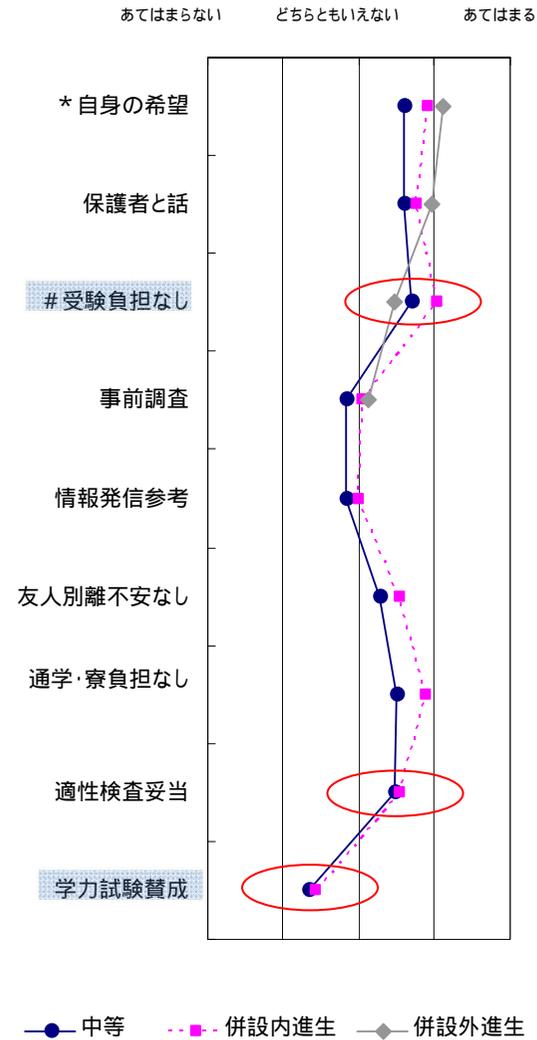
図中の\*は、中等と併設外進生との間に有意差あるもの、#は、併設内進生と併設外進生との間に有意差があるもの、は、中等と併設内進生との間に有意な差がみられたものを示している。グラフは、「そう思う」の得点の高いものから順番に並べられている。

## 入学に関して

- 1 中高一貫教育校への入学は、自分自身の希望だった。
- 2 中高一貫教育校への入学にあたって、保護者とよく話合った。
- 3 入学するにあたって、中高一貫教育校のことをよく調べた。
- 4 入学するにあたって、中高一貫教育校からの情報発信を参考にした。
- 5 入学するにあたって、塾などに通って準備をしましたか。
- 6 入学するにあたって、受験等の準備を負担と感じなかった。
- 7 入学するにあたって、小学校時代の友達と離れることに不安はなかった。
- 8 中高一貫教育校への通学(での寮生活)への負担はなかった。
- 9 中高一貫教育校の入学適性検査(作文、面接、実技等の特色ある出題)は、適切である。
- 10 中高一貫教育校の入学適性検査は、一般的な学力テストにした方が良い。



在校生



卒業生

図 1 入学時

# 学習内容に関して

- 11 中高一貫教育校での6年間(学習内容)は、満足のいくものだった。
- 12 文科系的教養の基礎となるような授業が行われていた。
- 13 理科系的教養の基礎となるような授業が行われていた。
- 14 芸術・体育などの授業が軽視されずに行われていた。
- 15 特色のあるユニークな授業が行われていた。
- 16 自己学習力や探究心を育てる授業が行われていた。
- 17 表現力を伸ばす授業が行われていた。
- 18 標準的な教科書の進度より早く進む授業が行われていた。
- 19 受験に直結する授業が行われていた。
- 20 ていねいな指導を図るため、少人数授業が一部で行われていた。
- 21 生徒の学力差に対応した授業が一部で行われていた。
- 22 選択科目を大幅に導入した授業が行われていた。
- 23 高校(後期課程)段階の内容を中学(前期課程)段階で習うことがあった。
- 24 総合学習(具体名)は内容が充実していた。
- 25 総合学習(具体名)は、自己学習力を伸ばすのに役立った。
- 26 総合学習(具体名)は、相互協力による学習を育てる内容だった。
- 27 道徳性を向上させるようなとりくみが行われていた。
- 28 キャリア教育(職業に対する関心を向上させるようなとりくみ)が行われていた。

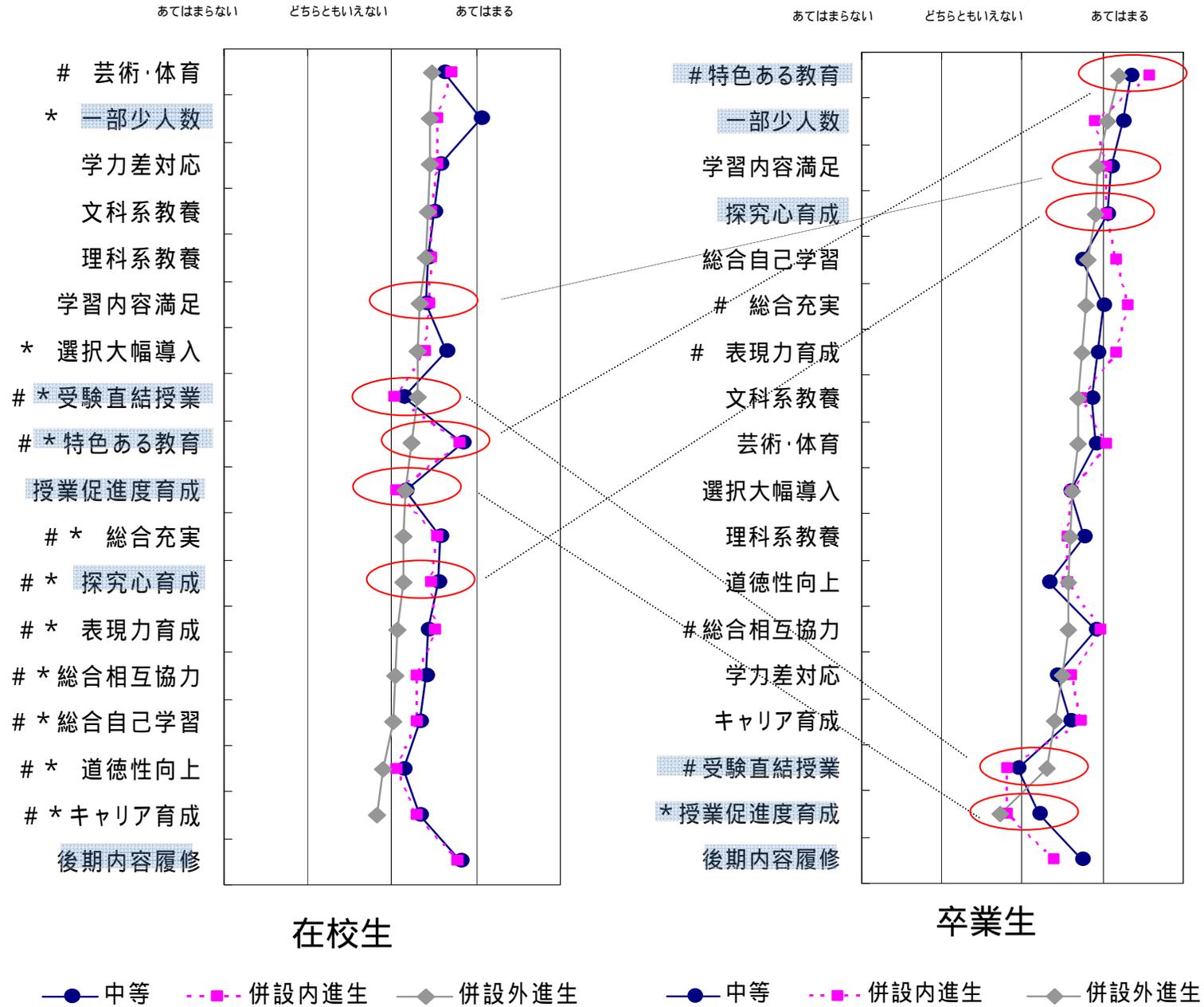


図2 学習内容

## 学校生活について

- 29 中高一貫教育校での6年間(学校生活)は、満足のいくものだった。
- 30 学校行事が活発に行われていた。
- 31 生徒組織による自主的な取組みが活発に行われていた。
- 32 クラブ活動が活発に行われていた。
- 33 国際的視野、社会的視野を広げるような取組みがあった。
- 34 学校生活を過ごす上で、施設設備が整備されていた。

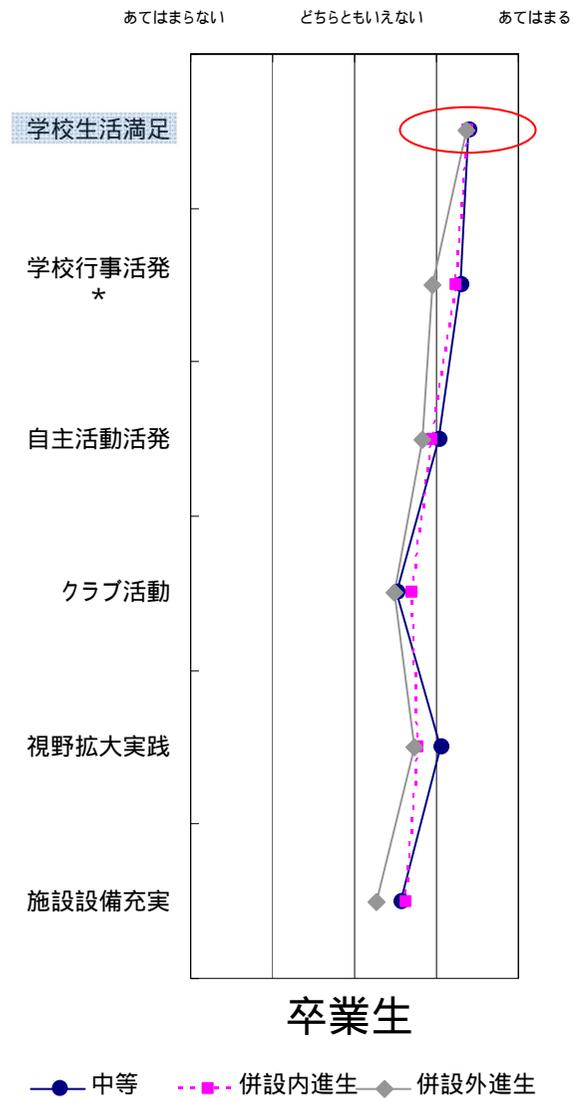
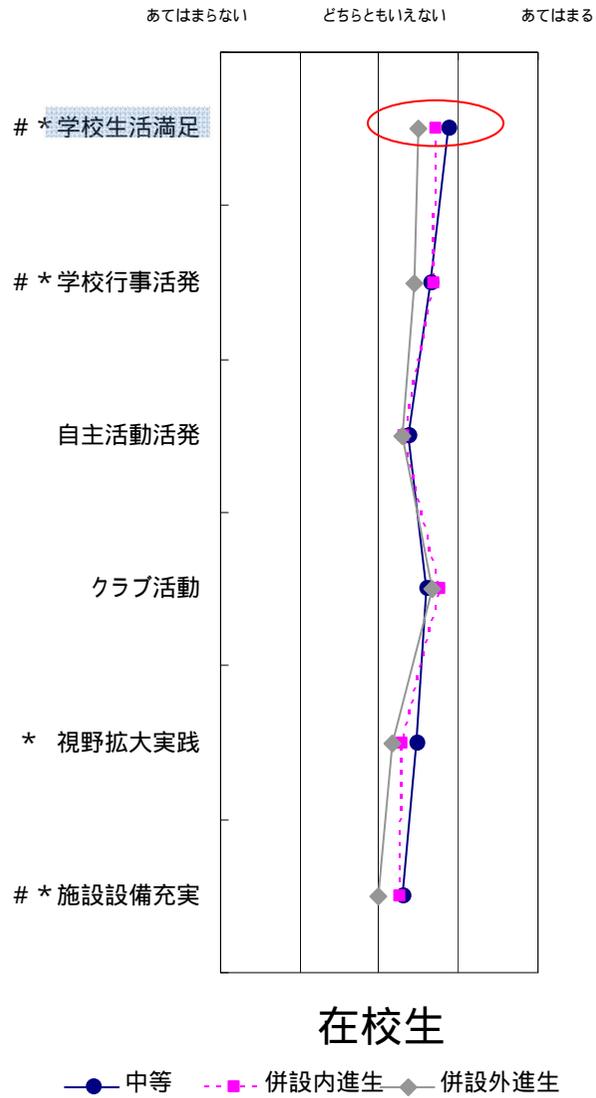
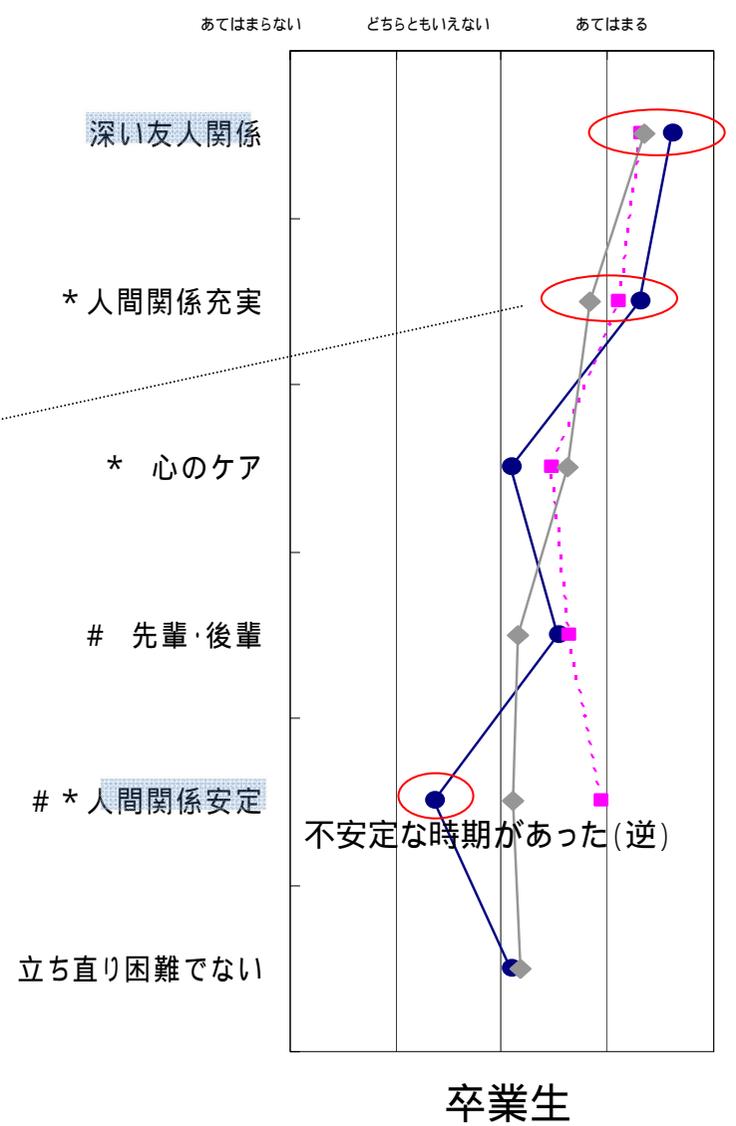
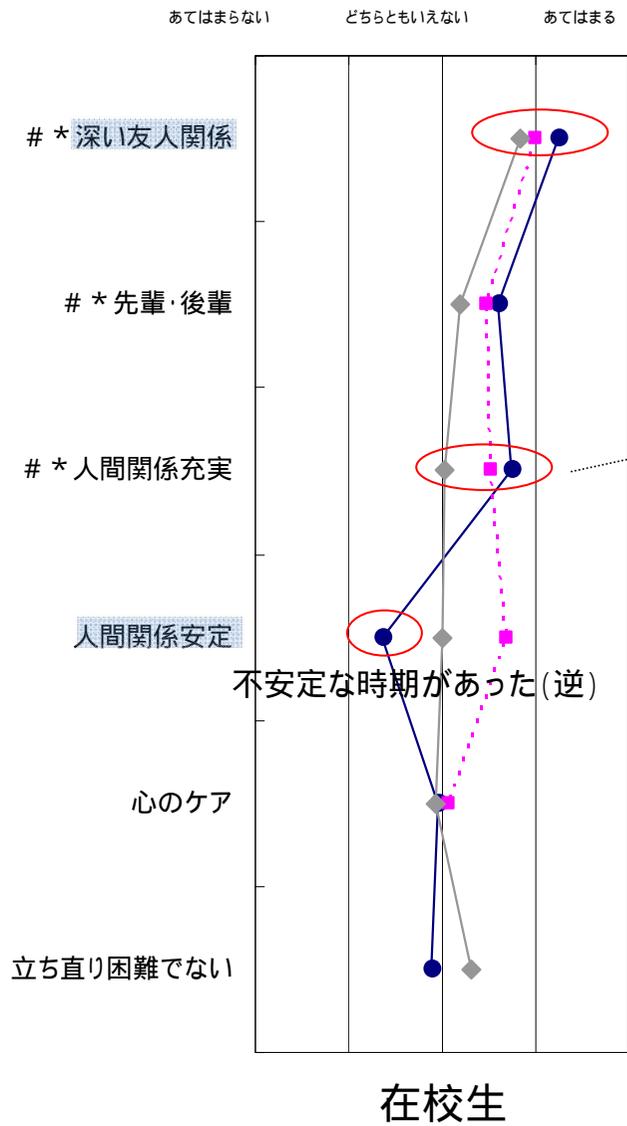


図3 学校生活

## 生活と人間関係

- 35 6年一貫だったことで、深い友人関係が築けた。
- 36 先輩・後輩とのつながりが、強かった。
- 37 中高一貫教育では、全体として人間関係が充実していた。
- 38 6年間の間には、人間関係に不安定な時期があった。(逆転項目)
- 39 6年の期間があるため、人間関係でつまずいても立ち直る機会が得やすい。
- 40 心のケアなどに対する校内の相談体制が整っていた。



—●— 中等    - -■- 併設内進生    —◆— 併設外進生

—●— 中等    - -■- 併設内進生    —◆— 併設外進生

図4 人間関係

# 一般的な同世代との比較

中高一貫教育を受けていない生徒・卒業生と比較して。

- 41 一般的な同世代と比較して、柔軟な思考力・探究力に優れている。
- 42 企画力・創造力に優れている。
- 43 人間関係を築く力に優れている。
- 44 調停力・協調性に優れている。
- 45 個性的である。
- 46 競争的意識が高い。
- 47 情緒が安定している。

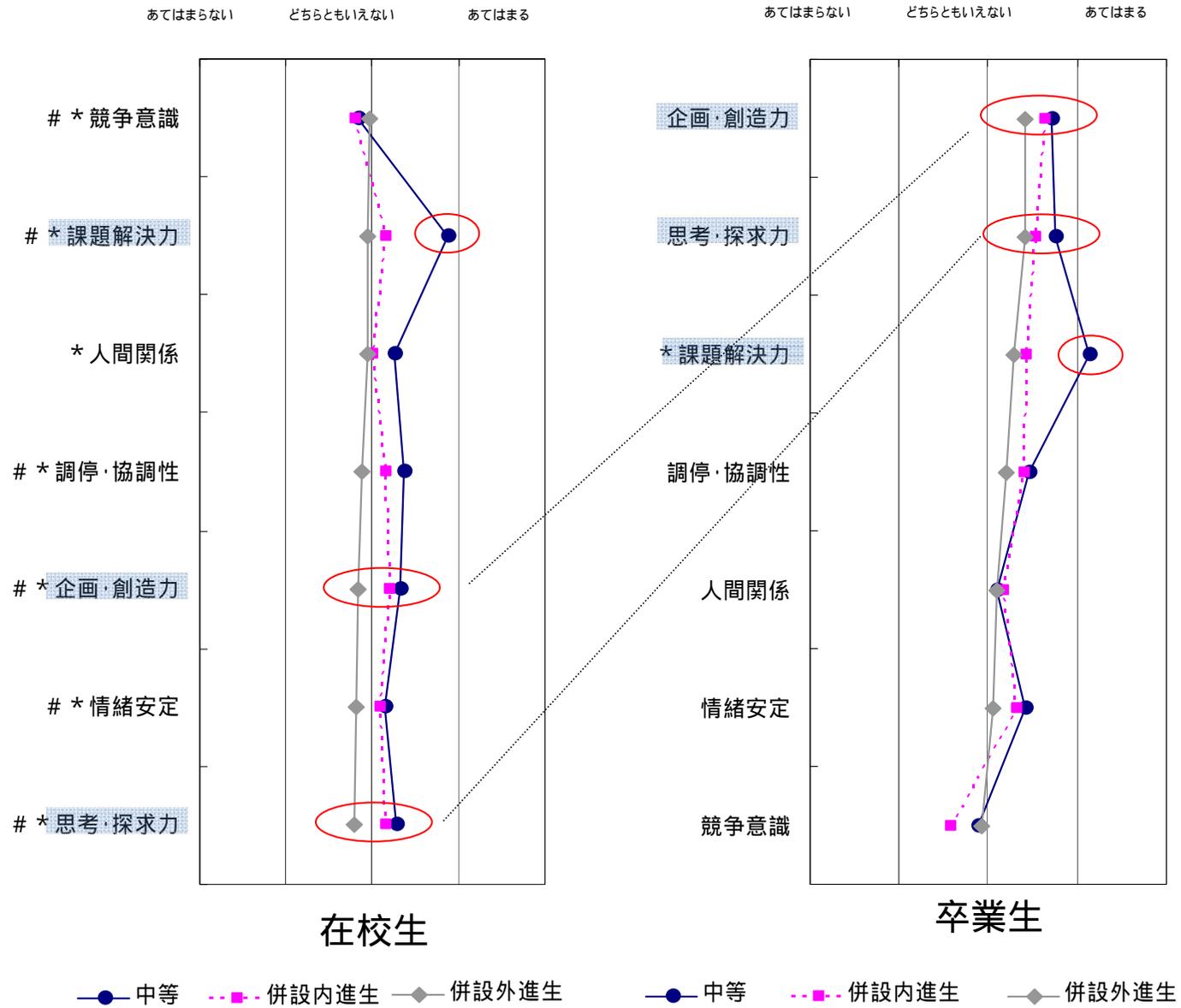


図5 同世代と比較した時の自己認識

## 「中だるみ」について

48 中高一貫教育では、いわゆる「中だるみ現象」(高校入試がないため、中頃に「無気力」化する傾向のこと)がある / あった。

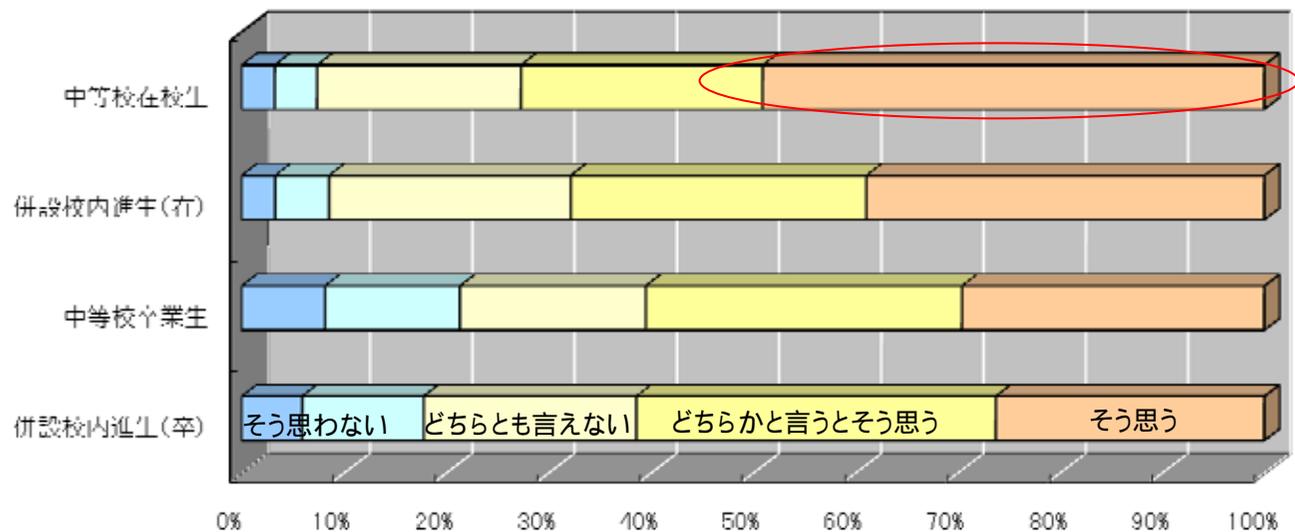


図6 中だるみがあるか(在学生・卒業生)

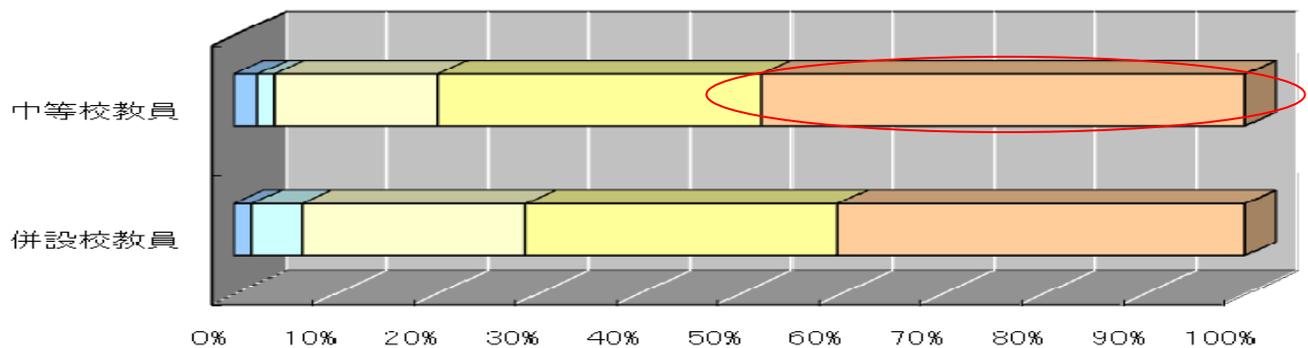


図7 中だるみがあるか(参考)同一調査における教員の意識

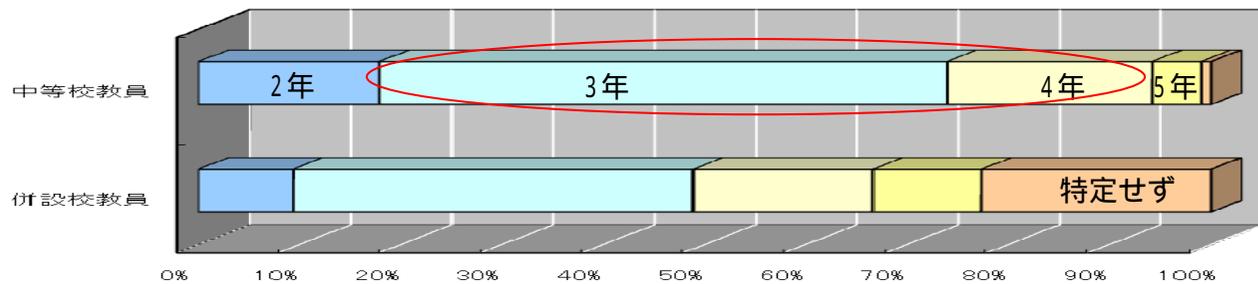


図8 中だるみの学年(参考)同一調査における教員の意識

**本報告は、全国中高一貫教育研究会 紀要(編集兼発  
行者 全国中高一貫教育研究会 代表 大谷 尚 名古  
屋市千種区不老町) 第6号 2010年10月 P3 - 10に  
掲載された『中高一貫教育10年目の検証(1)』の報告書  
における図に基づいてなされました。**

**項目等の詳細については、同紀要を参考にしていただ  
ければ幸いです。**